



## 第七話 柑子（こうじ）町の盆踊り

柑子町の盆踊り大会があるその日、祭りの中で私の担当する段取りの準備を終えると、きつねのおっさんに会うために急いで森に行きました。彼と子狐たちを盆踊りに連れて行くことを約束していたからです。

さて、待ち合わせ場所であった秘密の湖に着くと、おっさんは子狐たちに囲まれて何かに夢中になっていました。わたしが来たのに気づくと、すぐにこちらにやってきて、「こんにちは、先日はどうも悪い道をおいでいただきましてありがとうございます。」と丁寧なお辞儀をして言った。

「やあ、おっさん、ごきげんよう」わたしも丁寧にお辞儀し挨拶した。

「きょうはたいそうお世話になります。子供たちはきょうの盆踊り大会をととても楽しみにしております」

「そうですか。子供たち中心の踊りの時間は5時半からですから、まだ多少ひまがあります。まあゆっくり行きましょう」わたしは何かを囲んで真剣に見ているこぎつねたちが何を見ているのか聞こうとすると、おっさんは言った。

「先生、実はまたひとつお頼みしたいことがあるんです。あなたはきょうの祭りの屋台店の管理責任者をされてると聞いたんですが、わたしもひとつ出させてくれないかと思ひまして。」

「あっ、けつねうどんはだめだよ。あれはちょっとね」私は長年この種の管理を任されているが、食べ物を売る屋台には特に注意を払っており、衛生問題が少しでもありそうなものはみな断ってきていた。そして毒入りカレー事件の後、料理関係はすべて町内あるいはその近隣で飲食店を営業するプロだけに許すことにした。だからけつねうどんは論外だった。

「いや、そんなんじゃないんです。わたしが出したいのは詰め将棋屋だ」

「おお、大道詰め将棋というやつかな？なつかしいね」

「うん、それです」

「おっさん、将棋なんてできるんかい？」

「何をかくそう、わたしは、永らくきつね将棋界のチャンピオンだったんです。若いときに、父から鍛えられ、やがて地元の師匠について研鑽（けんさん）し、10歳でそのころのチャンピオンを全勝で破り、玉座につきました。日本中からほとんど毎日のように挑戦者がやってきたが、十年間玉座を守りました。やがて大阪の若い狐に王座を奪われたが、連続して十年間玉座にいたということで、棋聖の称号をもらって去年引退したばかりです。今では人間の将棋クラブに行っていて、そこではもちろん負け知らずです。ここだけの話だけど、たっぷりもうけさせてもらいました。まあ人間のプロ名人にはかなわないかもしれませんが、人間界の六七段の実力は持っているとお負しています。」

「それで盆踊りでも一緒けしようというわけかい」

「所場代はもちろん払います。儲けの1割2分の相場も心得ています」

「いや、そんなことじゃない。いんちきで儲けるのは困るんだ」

「私の詰め将棋にはいんちきはありません。お客さんが決して勝てないような詰め将棋はやりません。」

ただ簡単には私には勝てないまでのこと・・・」

「ならいいんだが・・・一手いくらだい？」

「大人百円、子供十円ですね」

「客がもし、詰めに勝ったら賞品はなんだい。」

「狐々（こんこん）堂謹製の将棋の駒を用意します。これは文字の代わりに動物たちのこった絵があつてなかなかの逸物です。きつねの家でこれのないのはありませんくらいはやっています。」

「ならいいでしょう。2メートル四方くらいの場所があればいいかね」

「いいですとも。」

そのとき、子狐のひとりが大きな声を上げた、「おっさん、わかった、これで詰みだ！」

「どれどれ。ちょっと失礼」おっさんは、子狐たちのいるほうに行く、そして笑い声で、「それではだめだ、ほれ、この桂馬が見えないかね。これはいただきだ、はっはっは」と言った。どうやら棋聖はもう商売道具を準備してきているようだった。

我々一行が柑子町の荒船神社に着くと、おっさんの娘とその婿の新婚夫婦が、これもうまく人間に化けて、我々を迎えてくれた。こどもたちはすぐに、出店のほうに行ってほしいものを買ったり、金魚すくいや射的に興じた。

私は、それぞれの屋台を見て回った。そして最後に、準備中のおっさんの詰め将棋屋に寄った。彼は、大きな風呂敷包みを開くと、慣れた手つきで、地面に将棋の盤面の印刷されたその風呂敷を広げ、これの四隅を石で固定した。そしてその上に将棋の駒を並べて、詰め将棋の準備が完了した。

珍しさに、子供たちや大人が集まってきた。するとおっさんはよく通るだみ声で口上を始めた。

「さあさあ、お立ち会い、御用とお急ぎでない方はゆっくりと聞いておいで — お嬢ちゃんお坊っちゃん、いいこだから一步前を出てね、そうそう — さあ、詰むといえは詰まない。詰まないといえは詰む。これが七変化（しちへんげ）自在のきつねも化かされるといわれるナナバケの詰め将棋、さあ一度は見てらっしゃい、差してらっしゃい。賞品はこれ、森の動物たちが今夢中になって時の過ぎるのも忘れて楽しむといわれるコンコン堂謹製の鳥獣（ちょうじゅう）将棋の駒。嬢ちゃん坊っちゃんもすぐ覚えられる、なんとなれば、このやさしい絵入りの解説書つきだよ。これを欲しい方は、いつもは二千円のところ、きょうはここ荒船神社は私のかわいい娘が嫁いだめでたい神社だから、特別におまけして千円でプレゼントしましょう。どうですひとつ、そこの学生さん。もちろん詰め将棋で勝った名人には無料で進呈、差し代はチャラというおまけつきだよ。さあ、いらっしゃい、見てらっしゃい、差してらっしゃい」

おっさんは口上しながら、鉢巻をして、扇子で行く人たちを指してはその歩みを止めひきつけた。すると彼は、人並みの中の自分の娘を扇子で指して、「おっ、そこのきれいなおねえさん。いやあ浴衣が似合ってたほれほれしますね。その隣の粋な兄（にい）さんはもしかしてボーイフレンド？えっ、もう結婚しちゃった。それはそれはおめでとうございます。さあ、では亭主ひとつこの詰め将棋に勝って奥

さんに頼りになるとこを見せてあげてはどうですか？」

亭主と呼ばれたそのきつね神主は、躊躇しているようだったけど、若妻に背中を押されて、「ではいたしましょう」と風呂敷将棋盤の前にすわった。少々にこずったが、彼は結局詰ませてしまった。それで鳥獣将棋の駒をもらった。そして箱を開けて駒を周りの人にも見せた。その駒は確かに森の鳥や動物の色絵が描かれており、裏には表の動物となんらかの関係のある動物あるいは親子の関係にあるものが墨絵で描かれていた。怪しいのは、王将になっているのは、九つの尾を持った九尾の狐（きゅうびのきつね）であった。

さて、このさくらの効果は十分あって、詰め将棋の順番を待つ人の列ができた。

これをきつねにだまされた人々ということもできるが、さくらはもともと人間が考え出したことであって、それをきつねがしたから特別扱いするのは差別である。私がおっさんを責めるやぼなことはすまいと思った。

さて、笛や太鼓の華やかな囃子とともに盆踊りが始まった。

始めは、子供たち中心の時間でしたので、ドラえもんとか、アンパンマンの曲が混じっていました。やぐらの上で太鼓をたたく人は一曲ごとに交替するのですが、そのばちさばきに見とれて私は30分くらい鑑賞しました。6人くらいの高校生たちが、男女交互でやっていました。微妙なシンクペーションを駆使して、それぞれが自分の得意技を披露していました。女性たちは、下から見られることを意識しているのか、わざとはっぴに隠れるくらい短いショートパンツをはいて、自らを陶醉の境地に誘い込み、狂い打ちをしているかのようでした。しかし子供たちの興味はまだお菓子や、光るおもちゃのほうで、なかなか太鼓の魅力に気付く様子はありません。

大人の参加する踊りには私も加わって、時の過ぎるのを忘れて踊りほうけました。9時に予定通り祭りは終わり、後片付けが始まりました。おっさんのところに行くと、彼はいなくて、すでに子狐たちを連れて森に帰ったようでした。

おっさんがその日どれだけ儲けたかの詳細はわかりませんが、彼は東北大震災で被災した動物たちにその儲けの多くを送ったと、あとでフクスケから聞きました。

蛇足ながら、私もこの詰め将棋をして千円三百円負けました。少しは被災地の復興に貢献したことになるかもと自分を慰めています。